

はばたき

2012. 冬 No. 72

入所のちから



- 想いはここにある P 4
- 辿る記憶 P 6



新年を迎えて

理事長 石野 清治

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、明るい穏やかな新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

また、平素より社会福祉法人大久保学園の事業推進に対しまして、格別のご理解とご協力を頂きまして誠に有難うございました。本年も旧年に増してのご支援、ご鞭撻を下さいますようお願い申し上げます。

昨年、これまで私たちが経験したことのない大震災が発生しました。この震災では、多くの尊い人命が失われました。震災により亡くなられた方々の無念さと、最愛の肉親を失われた方々の深い悲しみを思いますと誠に痛恨の極みであり、哀惜の念に堪えません。心から哀悼の意を表するとともに、すべての被災者の方々に心からお見舞い申し上げます。

震災の発生より、早10ヶ月になろうとしておりますが、被災地の復旧復興への確かな道筋がまだに見えていない中、私たちの仲間との障害関係者の中にも、住む家や施設等を失われた方々、原発事故の影響により耐え難い不便と苦難のなかでの避難生活を強いられている方々などが多数いらっしゃいます。被災地域の復興のためには、長期的な

視点での継続的で組織的な支援が必要であります。日本知的障害者福祉協会等が中心となつて行う支援等に対しまして、さ

さやかではあります。積極的に協力させていただきます。これまでの皆様の温かいご支援とご協力にこの場をお借りしましてお礼を申し上げますとともに、今後被災者・被災地への更なるご支援に対しても、ご協力下さいますようお願い申し上げます。

日本は東日本大震災から初めてのお正月を迎えました。日本のみならず世界的に「危機」や「困難」ということが常態化しつつある世相の中で、私たちの生活の停滞感は年ごとに増大しているように思えます。長引く景気の低迷、少子高齢化、環境問題の深刻化、地域社会の疲弊、そして東日本大震災が起きて、東京電力福島第一原子力発電所の事故が事態を一層深刻にしています。今までの暮らし方でよかったのか、新しい年があけても多くの人が自問し続けているのではないのでしょうか。

このような状況の中で、社会福祉法人大久保学園は昨年開設40周年を迎えることができました。昭和46年に社会福祉法人を設立し、定員50名の入所更生施設の開設に

始まる大久保学園が40年の長きにわたつて、知的障害の支援の為の各種事業を試行錯誤をくりかえしながらも滞ることなく、継続、充実してこれたことは、利用者の皆様とその保護者の方々、船橋市を始めとする行政関係各位、そして地元船橋市金堀豊富地区の皆様のご理解、ご支援があったからこそと深く感謝しているものであります。

今後の10年、20年の事業の推進にあたっては、昨今の政治、経済の停滞等により、先行き不透明感が漂う「困難」を強く感じているものであります。しかしながらこのような社会福祉法人をとりまく福祉環境の変化を十分に認識しつつ、「利用者皆さんが必要とする支援が出来る」、「地域の皆さんに支えられる」、「従事者が安心して仕事ができる」、そのような事業の展開を図りたいと強く思っているものであります。

そのためには、改めて、自分たちの組織が何のために、誰を対象として、何を指すのかという法人の使命を明確にし、職員との共通認識としていくことが重要であると認識しております。

本法人の存在意義は、「障害があるがゆえに支援を必要とし、一層の生活の向上を求め人達に対して、その生活のニーズにあつた心のこもった支援を提供すること」によつて、安心や安全、そして生きがいのある生活をして頂くことにあることは明白であります。そしてそれは、安定的に継続してなされなければなりません。

本年は、障害者自立支援法の施行によ

り、入所施設大久保学園が新体系の移行を3月までに終えなければいけません。

又、船橋市光風みどり園が指定管理の最終年となり、今後の対応についての決断が必要となります。更には、「原宿ホーム式番館」の竣工開設が予定されております。そして東葛中部地区総合開発事務組合様との契約による「みどり園改築等PFI事業」が26年3月の完成に向けて建築工事が本格化することとなります。

そして何よりも重要なのは、高齢化やニーズの多様化している各施設の利用者さんの日常をしっかりと支援していかなくてはなりません。

このように、本年も大きな課題に取り組むこととなります。これらはすべて、利用者の生活を豊かに充実させていくための前向きな取り組みであります。効率的かつ適切なマネジメントが可能となる様に、組織的な強化を図りつつ、人材の活用、育成を図りながら、役職員が一人となつて取り組むこととしております。

40年に及ぶ歴史の中で「前年踏襲」は許されないというところが、大久保学園の職員にとつては厳しいところかもしれません。しかしながら、障害福祉の制度や施策が変動しており、利用者の意識やニーズが変化している今日的状況では「前年踏襲」では取り残されてしまつと自覚すべきであります。

どうぞ本年も変わらぬご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。年頭にあたり、皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げます、新年のご挨拶と致します。



なひる 萎えて怯んで一歩引いて

大久保学園 支援課長補佐

吉野 員 史

「今こそ底力が試される時

いよいよ入所更生が新事業に移行する年の幕明けです。新制度の中では施設入所支援が置き去りにされた感、周知の通りですが、ここに居る人たちの日常は何も変わることはありません。今こそ我々の施設職員魂、所謂底力が試される時であり、闘志漲る思いで一杯です。

現在、4月からの新体制に向けてのシミュレーションが大詰めを迎えています。まずは制度云々という前に利用者の状態像を知見、経験から見つめ直すことが必要です。従来の取り組みでは、利用者のニーズに心えられなくなっているのではないかと。これまでも、日中活動を中心とした枠組みの中でマイナーチェンジを繰り返して来ましたが、思いのほか変化のスピードが速い。これに後手で回るようでは、安心と安全は担保できないと考えています。

根拠のあるプライドを持って欲しい

利用者が「あたり前」の生活を送ることを邪魔することなく、しなやかに変化

へ対応して行かなければなりません。全員が同じなら私達プロは施設理念のもと迷うところはありませんが、この「あたり前」の種類が増えている人たちにどう折り合いをつけていけるかが勝負だと思っています。

学園は、入所定員に対して、夜勤者を3名配置することが義務付けられます。大半の人たちは夜間中の介護を必要としないのですが、この日に泊まった3名の職員は今日と明日の2日間は日中活動に参加できないということです。利用者と共に過ごすことから始まる仕事であり、昼間は働くという施設方針の根幹を揺るがす状況になりかねません。

さて、ここからが我々の腕の見せ所になります。冒頭で述べたようにここで暮らす人たちの生活は変わりがないのですから、運営手腕と職員のアイデアを結集して日中活動を維持しながら個別化への対応をしっかりと行っていくことです。又、どんな枠組みを作ってもそれを実践するのは職員です。「人財は宝なり」という理念のもと育成に重点を置きますが、個々人も受身の姿勢ではないけないと思っています。多様化するニーズに

る為には、経験則オンリーの施設職員では通用しません。専門的な知識を研鑽し、情報を自ら取りに行くような意欲を持ち、根拠のあるプライドを持って従事して欲しいと思っています。

無形の「気づき」こそ私達の生命線

それらのベースがあつて始めて一番大切な「気づき」が活かされます。この「気づき」こそ利用者の安心と安全を守り、権利擁護にも繋がるものです。ややもすると職場の中ではこれが出きる人とそうでない人が本人のセンスのように称されることがあります。しかし、先述したことが個々のセンスによって左右されているとしたら、これ程危険なことはありません。「気づき」は鍛えられるものであり、誰でも習得出来るものです。

第一段階の「気づき」は安心や安全に繋がるものですが、これは充分、訓練で養うことができます。職場内の研修や日常業務内でのやりとり、実践トレーニング等々。口で言うほど容易くはありませんが、これなくして成り立つ仕事ではありません。

次に私達が最も大切にしたいこと。無形の「気づき」です。丁度、冬の季節。トレーナーの下の長袖Tシャツの袖がたぐまっていることを知っていますか？ 若い集団が気づけているかとなると今は自信がありません。これが無くても生命を脅かすような実害は無いのでしょうか。

業務の優先順位やマニュアルに登場することも無いかも知れないことです。

入所施設は頼られる象徴として存在しなければならない。

私達は御家族から大切な人を預かっている重責を担っており、入所施設は頼られる象徴として存在し続けなければならない責務があるはず。ここは物づくりの場でもないし、病気を治す所でもない。ここで暮らす人達がいます。何てことのない「気づき」を必要としている人達を見ずして何を語っても意味がないのです。

最後に後ろ向きなタイトルについてお話ししたいと思います。甲子園出場経験もある滋賀県の北犬津高校の部訓は「萎えるな怯むな一歩も引くな」というものです。かつて、高校球児であった私はこの言葉に感銘を受け、自身の人生観にも合うのですが、こと利用者支援においてこの言葉は真逆であると思っています。

私は利用者支援において自信満々の人が苦手です。明確な意思表示が難しい人たちの人生に少なからず足を踏み入れることに真摯に臆病でなければいけません。「萎えて怯んで一歩引いて」これこそ支援の本質だと思っています。入所施設を取り巻く環境が難しくなっていることは確かですが、それに立ち向かうべく、同じ志を持った多くの法人の仲間達と新たな一歩を踏み出していきたいと思

想いはここにあり

頑張ろう！ 入所施設

大久保学園 山田 聡子

利用者の笑い声、喧嘩、走る音、食事、すり傷、寝顔……全て日常生活の中にあるもので私達はこれの中に一緒に居ます。

他人の生活の中に入り込む仕事はそう多くはないはずで、そのことに魅力がある反面、自分の言葉や行動が相手の生活の安心を左右してしまうかもしれない怖さもあります。

ただ、家族にはなれないけれど家族の顔で声で気持ちで笑ったり泣いたりを共にしながら生活を支えられるような職員でありたいと思いい支援にあたっています。

そして利用者だけではなく私たち職員も生活を共にしながら人との関わり方を学び、働くことを覚え、利用者を支えることが家族を支えることにも繋がることを知るのだと思います。

大久保学園も4月に新法に移行となります。入所施設には高齢化、障害の多様化、余暇の提供の仕方等々、課題はたくさんありますが、利用者の生活がここにある限り、今ある生活を守るだけでなく、生活の質をあげる為に一つ一つと向き合い、解決し学んでいくことをやめてはならないと思っています。

森川 千明

ここ数年、学園でも障害の重度化、多様化の傾向が見られており、特別な対応や支援を要する利用者も出てきています。施設でも対応が難しい方を家庭でみる事は、とてつもない労力を消費すると共に周囲の理解と協力が必要となってくる為、家族の方の想いや負担は計り知れないものだと思います。また、ご本人、保護者の高齢化に伴い、自宅で見る事の難しさを更に実感する中、24時間体制で家族の生活をサポート出来る入所施設の存在は大きいのではないのでしょうか。

その反面、利用者の高齢化による介護の面、大病を患っている方への医療的ケアを要する場面が増えてきています。学園でも高齢化対策や医療的ケア面での知識を深め、近い将来に備えていかなければならないと思います。また私たち職員は、家庭により近い生活を利用者に送って頂ける様、日々努めていかななくてはなりません。「大切な家族をどのような想いで預けているのか」施設での生活がなかなか見えない分、保護者と密に連絡を取り合いその想いに応えべく業務に励んでいかななくてはならないと思っています。

瀬楽 徹

健康管理のひとつとして食事の提供が欠かせません。食事に関しては、個人の身体状況、栄養状態等に応じた「栄養且つバランスの取れた食事」を提供しています。特に昨今は高齢者の方も含め咀嚼や嚥下が難しい人の為に個々にあった食事の提供が必要となってきています。食事は皆さんにとって楽しみな時間です。私達はそういった空間作りを意識しながら誤嚥等の事故に細心の注意を払い支援にあたりたいと思っています。

また、集団生活なので、感染症等に罹りやすくなります。衛生面での安全管理は施設にとって大きな課題となります。日常的に勉強会等を重ねていますが、複雑な多岐にわたる感染経路、発症の時期、原因が見えないところに難しさを感じます。ドアの取っ手、テーパー等の共用物やゴミ等にウイルスが付着し手から口へと感染することも考えられます。基本の対策は手洗い、うがいの励行とそれらの消毒です。効果が目に見えないからこそ日々、地道に取り組みむことが利用者の安心と安全に繋がると信じています。

入所も通所も 原点は同じ

光風みどり園 清水ゆかり

通所から見た入所は、利用者さんの時間がゆっくり流れているというイメージがあります。通所と入所の違う所は、利用時間の長さが日中のみなのか二十四時間なのか、活動主体なのか生活主体なのかという事だと思います。逆に共通の所は多く、まず、高齢化を伴う重度化、あわせて保護者の高齢化により、皆さんが安心して過ごせる場所を私たちが作り上げていく事が必要不可欠だという事です。次に、利用者さん一人ひとりに違う支援が必要な事、支援者が利用者さんの人権を守りながら専門性を持って支援する事は、形(施設)が違っていても全て共通な事だと思います。今回、イメージを考えた中で、通所も入所も共通(一緒)だという事を改めて感じました。

光風みどり園 神谷 健太

通所施設では、生活面での支援は殆どの場合家族が行っています。しかし入所施設では作業支援だけではなく、生活支援も並行して行わなければならない、介助面での専門的な知識や技術も必要とされているのではないかと思います。通所施設から見ると、それはとても大変な事だと思っています。しかし、大変だと思っ反面、学んでいかなければいけない事だとも思いました。通所施設でも高齢の利用者、生活面での介助を必要とする利用者は、これからどんどん増えてくるものと思います。そうなる前から知識や、技術を求めるのではなく、いつでも対応できるように、日頃から生活支援について学んでいかなければいけないのだと思います。施設が違ってても、利用者から支援員が求められるものは変わらないものだと確信しています。

大いなる母なる愛で

今や当法人にとって準職員の方は欠かせないものとなっています。雇用の形態は少し違っても、利用者支援に関して何ら変わりはありません。若い職員集団の中で豊かな人生経験は発揮され、仕事に対する姿勢、利用者への心遣い等、見習わなければならない点がたくさんあります。

大久保学園

中澤 正美

ヘルパー講習で講師に来ていた 入所されている方にとって、入所施設が家の次に居心地のいい場所としてある様に、時には家族のように接したり一緒に作業をしたりしながら、準職員一同学園の頼れる存在になるべく頑張りたいと思います。



前列左端が筆者

が、障害の重さや思っている病気を理解していくうちに利用者さんの為に何が出来るかと自分に問いかけながら日々の仕事に専念するようになりました。最近では、利用者さんの歩みが遅くなったり、体力を考慮して室内班に移動したり、また半日で作業を終わりにするなど高齢化の波が学園にもきたのだと実感します。

憶 記 る 池

今の私を作るもの

大久保学園 瀬楽 千枝



「命」や「生きる」というテーマについて考えると、明るく上を向いた響きなのに、頭を巡るのは少し暗い記憶でした。今まで、姉や友人が小さな命を授かり、様々な笑顔を見てきました。一方、親しい友人との悲しい別れもありました。色々きっかけはありましたが、私にとつて「生きる」希望を与えてくれたのは知的障害を持った方たちとの出会いでした。

そもそも、私がこの道を目指すきっかけになったのは学生時代のいじめでした。今思えば「そこまで思いつめなくても良かったのではないか」と思う様なものですが、当時はそうは考えられませんでした。卒業後も人と深く関わる事が得意ではありませんでしたが、アルバイト先のパートさんに「今度子ども文化祭がある」と聞き、何の気なしに一人で行った所で私の心がすつと晴れた気がします。その息子さんは近くの特別支援学校に通っており、ここでは皆真っ直ぐな目をして、笑顔で、とても活き活きとしていました。私に無いものを沢山持つている気がして「この人たちと一緒に仕事がしたい」と強く思う様になりました。

大学では福祉科を専攻して、ガイドヘルプのアルバイトをしながら勉強・サークル・遊びと同じ目的を持った仲間と充実した日々を送りました。大久保学園に入り、真っ直ぐぶつかってきてくれる利用者さんがいて、人をよく見ている利用者さんがいて、自分の気持ちに正直な利用者さんがいて……そういう素直さを羨ましく思い、皆の笑顔に元気を貰っています。怒る事も多いけれど、笑う事も本当に多い毎日です。

今、実家に帰れば姉の姪・甥がいて家族の形が変わっていきます。父・母も老い、時の流れを実感しています。自分の中にも小さな「命」が芽生え、毎日一生懸命生きています。沢山の人に支えられて今の自分がある事に感謝してこれからも笑顔で頑張りたいと思います。

兄の存在

大久保学園 高橋 恭平



実家に住んでいる私の兄は知的障害を持っており、ダウン症です。幼い頃の私は兄の存在が非常に嫌だったのを覚えています。知識もなく、兄に対して何の理解もない私は友人達の「兄」を見て、私の兄は病気で、友人達の「兄」とは違うと考えていました。遊びにも連れて行ってくれない。外でサッカーもしてくれない。友人達の「兄」は兄弟で遊ぶのに……家族で出掛ければ周囲からの視線。親しい友人にさえ自分の兄の話はしたくない。友人達のような「兄」が欲しかった。これが幼い頃の私です。

私が小学校高学年の時兄は養護学校に通っていましたが、帰りのバス停で、一般の中学生にいじめられるところを養護学校の先生が見つけ、自宅に連絡がきました。両親と兄を迎えに行き、激しい怒りに駆られた私はその中学生に殴りかかりました。なぜ何もしてない兄が、通りすがりの他人にいじめられなければならないのか。兄は言葉で表現する事が難しいから助けも呼べない。兄が友人達のような「兄」とは違うからなのか。

思い出せば、あの日から私の中で何かが変わったように思います。知識がないながらも兄を理解しようとし、気が付けば大学は福祉学科、就職は大久保学園でした。兄は現在実家から授産施設で働いています。私は実家から離れています。実家に戻った時は兄の好きな物を土産に買って行き、兄の仕事帰りは私が迎えに行ったり、家族での外食は兄の好きな物を御馳走しています。どこにでもある家族の時間を過ごしています。

現在の私にとって兄は「兄」であり、私を育ててくれたものも「兄」を含めた家族です。幼い頃の私も含め、理解しようともせず「兄」に対する偏見や差別。「兄」の表しようのない怒り。身近な存在であり、近くで感じてきたはずの私だから、学園の利用者の方の為に働かなくてはいけない。今回、執筆する事で、いつの間にか忘れていた大切な気持ちに気付かされました。そして、それが「兄」に「弟」だと思ってもらえる事だと信じています。

それぞれの施設だより

大久保学園

「環境整備」を実施する日



学園では月に2回「環境整備」を実施する日を設定しており、その日は作業を半日休みにして大がかりな清掃を行っているます。

掃除機掛けや廊下のモップ掛け等は毎日行っていますが、日常ではなかなか出来ないエアコンの掃除や外の除草等、その都度必要なことを一斉に取り組んでいます。特にワックス掛けには力を入れています。機械を使い汚れを剥がし、ワックスを掛けピカピカの状態に仕上げます。

これらのことは「利用者が気持ちよく生活出来る様に」を基本として取り組まれています。このような機会に職員と一緒に「自分達の生活している場所を掃除している」との想いで行ってもらう良い機会になっていければと思います。(田尻)

ふなばし工房

暮れも押し迫る12月、毎年恒例の食事外出を行いました。

ふなばし工房も70名を超える大所帯となりましたので、今回は6つの作業班を4日間に分け、例年お世話になっている「すたみな太郎」千葉北店で実施しました。食事メニューも焼肉からお寿司、カレーといったものから、ケイキやアイス等のデザートまで全てが食べ放題となっていますので、楽しみにしている利用者の方も多く、今回も楽しんでいただけたのではないかと思います。ふなばし工房は仕事を中心に活動に取り組んでいますので、工房全体での余暇的な活動は9月の旅行と12月の外出の年2回と少ないのですが、その分皆さんに満足いただける充実した内容の余暇活動を提供させていただき、利用者の明日の仕事の活力となれば幸いです。(伊藤祐)



光風みどり園

昨年をふり返ると東日本大震災や紀伊半島を中心とした台風12号の被害など、全国的に大変な状況をもたらした。

一年でもありました。新年を迎えるにあたり、今年こそは、明るいニュースが多い年となるよう思うところです。

光風みどり園では、今年、黒埼悠仁さん、鈴木裕貴さん2名が成人を迎えました。この2名の方は、特別支援学校高等部を卒業後、みどり園に入所され、現在は清掃班で作業に励んでいます。学生の頃から光風みどり園に実習に来られ、出会った当初は16歳程で少年という感がありました。今では、体格も一回り大きくなり、作業に取り組む頑張りも大人らしくなってきたと感じます。

1月6日には、みどり園で成人を迎える二人のために、少し早い、ささやかな成人式を行いました。当日は、お忙しい中、保護者の方にもお越し頂き、本人達も最初は少し照れている様子でしたが、成人を迎えた決意を皆の前で述べた時は、さすがに逞しく見えました。

二人にとって、これからのみどり園の活動を通して益々、成長し活躍されることを願います。

みどり園では、幅広い年齢層の方が利用されています。船橋市から指定管理としてスタートした7年前は、2世代から今の年の差でしたが、今では3世代の利用者さんが活動されています。各世代で交流ができ、安心安全に利用できる施設、調和のある安定した環境づくりにこれからも努力したいと思えます。(高山)

地域生活支援センター

今回は最近ちょっと印象に残ったエピソードを紹介いたします。

学園のホームで自転車通勤をしている方が、途中の道に砂利が多いせいか前後のタイヤを繰返しパンクさせてしまい、その度に職員が修理に運ぶという状況が頻繁にありました。多い時には3カ月で2、3回。経済的にも、修理対応の負担的にも困っていたのですが、先日、就労支援で御縁があった船橋市内事業所でノーパンクタイヤの施工を行っているとの話を伺い、ピンと繋がりました！

これだ！早速事業所に状況を説明して相談するとすぐに対応可能との事。前後のタイヤを15分ほどでノーパンクタイヤに。修理代は5000円。特殊な円柱状の樹脂をチューブの代わりに入れ、乗り心地も空気タイヤとそれほど変わりません。震災以降は防災タイヤとして需要が多いそうです。どこで何が繋がるか分かりませんが、無縁社会といわれる昨今、様々な方と縁をもつ事の大切さを改めて感じさせられたエピソードでした。(入澤)



一見普通。メンテナンスも無料！

昨年4月に原宿ホーム老番館(入所定員10名)が開設しました。安心を確保した家庭に近い生活は有効であったと思っ
ています。式番館でも利用者
のニーズに
応えるべく
準備を進め
ています。



**原宿ホーム式番館
(ケアホーム 入所定員10名)
建築工事進行中**

昨年から日本知的障害者福祉協会の知的障害者援助専門員養成通信教育を受講しました。今回は法人の中で4名の職員が受講しました。知的障害者の医学や生活支援等10教科あり、教科ごとにレポートを提出し、3日間のスクーリングとテストが行われます。日ごろの業務を様々な角度から振り返ったり、見直したり、ヒントをもらったりと大変興味深い内容でした。あとは、テストの結果次第ですが、通信教育を受けて本当に良かったと思っています。

**知的障害者援助専門員
養成通信教育を受けて
柳原 聡**

風の詩

新しいものを作りだすのは簡単なことではないけれどみんなの嬉しそうな顔、頑張っている顔を見ているとやって良かったと心から思います。 白井菜美子

いい匂い
パンやお菓子のいい匂い
それは毎日みなさんが頑張っている証です。
これからも一緒に頑張りましょう。
金子真理恵

ケアホームの皆さんは食事のたびに「美味しいよ」と言って下さいます。笑顔にたくさん会えるようなご飯作りをしています。 中村佳代子

第39回手をつなぐ作品展

来たる2月25日(土)・26(日)に千葉県知的障害者福祉協会主催「第39回北部地区手をつなぐ作品展」がイオン八千代緑が丘店にて開催されます。同店舗様の協力を頂き今年で7回目を迎えました。千葉県内の知的障害児者施設の作業活動の中から生まれた創作品を広く社会に紹介する事によって、地域の方々の理解と関心を深めることを目的とした展示即売会となっております。皆様のお越しを心よりお待ちしております。



参加者が集まり打ち合わせを垂ねています

中島 康雄

寄付金

平成二十三年十二月一日
平成二十四年一月三十一日

〔後援会〕

西井 建二様 本澤 正行様
並木 信子様 大澤 征一様
染谷 寛治様

〔一般〕

布施 充蔵様 布施 義高様
大久保京子様 和田 浩行様
船橋市社会福祉協議会様
初山 敏雄様 阿部川春吉様

ありがとうございました

行事予定

- 大久保学園**
2/11 保護者会新年会
2/17 避難訓練
2/25 新体系事業保護者説明会
2/25~26 作品展
3/25 佐倉マラソン
3/26~27 健康診断
- ふなばし工房**
2/17 避難訓練
- 光風みどり園**
2/7 保護者会新年会
3月 保護者会
避難訓練



今号は入所施設について言葉を集めました。いざ原稿が集まってみると筆者の殆どが高齢化に触れていました。機関誌としては、少々くどくなってしまうかもしれませんが、これが現実なのだと実感します。

それでも、いつもと変わらぬ雪解け間近。24年度の採用予定職員の研修が始まるうとしています。色々、いろいろ、イロイロありますが、基本は「笑う門には福来る」の精神で今年も乗り切りたいと思います。(吉野員史)

はばたき 二〇二二冬号 七二号

発行/平成二十四年二月
発行所/社会福祉法人 大久保学園
TEL 〇四七(四五七)二四六二
FAX 〇四七(四五七)四〇六九
URL http://www.okubogakuen.or.jp
Mail shienka@okubogakuen.or.jp
編集/大久保学園 広報委員会
表題書/大久保学園長 中原 強